

日中対照言語学会第42回大会（2019年度冬季大会）のご案内

記

日時：2019年12月22日（日）9：20～16：35

会場：大阪産業大学梅田サテライト（JR大阪駅南口下車、阪神百貨店右の通りを直進、徒歩約5分、大阪駅前第三ビル19階。大阪市北区梅田1-1-3。電話06-6442-5522）

参加費：1,000円（会員、非会員共通）

プログラム

- 受付（8：50～）
総合司会 丸尾 誠（名古屋大学）
- 大会開催校挨拶 張 黎（大阪産業大学） 9：20～9：25
- 開会の辞 彭 飛（京都外国語大学） 9：25～9：30
- 研究発表1. 接続助詞「のに」による言いさし文に関する研究
—中国語の副詞“明明”文との対照を中心に— 9：30～10：05
何 潔（九州大学大学院）
- 研究発表2. 脳内時空間と文法—“在+場所”と“在+動詞”— 10：05～10：40
岡原嗣春（大阪産業大学非常勤講師）
以上司会 下地 早智子（神戸市外国語大学）
- 休憩（10分間 10：40～10：50）
- 研究発表3. 又吉直樹著『火花』と毛丹青译《火花》—日中対照表現論・文学作品（日→中）事例研究②—
藤田 昌志（三重大学） 10：50～11：25
- 研究発表4. 论形容词的几种特性 11：25～12：00
时卫国（山东大学）
以上司会 余 維（関西外国語大学）
- 昼休み（60分間 ビルの階下に食堂街あり） 12：00～13：00
- 講演 关于“流动”事件的汉日两语表述方式对比研究 13：00～14：00
古川裕（大阪大学）
以上司会 彭 飛（京都外国語大学）
- 研究発表5. 「慰め」行動における日中比較研究 14：00～14：35
高琳（神戸大学大学院）
- 研究発表6. 中国語における「一」を伴う数量表現の用い方の特徴について
—日本語との対照の視点から— 14：35～15：10
吉野孝介（京都外国語大学大学院）
以上司会 安本 真弓（跡見女子学園大学）
- 休憩（10分間：15：10～15：20）
- 研究発表7. 「恵まれる」構文の特異性について 15：20～15：55
馮一峰（京都外国語大学大学院）
- 研究発表8. 中国語の“被”構文と日本語の受身文の重なりと相異—述語動詞の範囲を中心に—
劉嘉勇（名古屋大学大学院） 15：55～16：30
以上司会 王 学群（東洋大学）
- 閉会の辞 加藤 晴子（東京外国語大学） 16：30
- ※昼食の間、拡大常務理事会を開催予定。
※当日入会申し込み、学会費の納入も受け付けます。（年会費：社会人4,000円、院生2,000円）

2019 年度冬季大会

講演及び研究発表 テーマ・発表者と発表要旨

講演

テーマ：关于“流动”事件的汉日两语表述方式对比研究

講演者：古川裕（大阪大学）

講演要旨：

本报告将通过汉日两种语言的对比重点讨论人们对〈流动〉和〈流动物体〉的认知识解及其表述上的共同点和不同点。

经过研究，我们发现如下几点事实：一、在语言表述的层面上，日语对流动物体的选择范围比汉语宽，除了液体以外，气体以及声音等抽象名词都可以做日语动词「流れる」的主体；而汉语一般只有液体才可以当动词“流”的主体。二、日语还可以把「桃」「桃子」、「家」「房子」、「橋」「桥梁」以及「トイレ」「厕所」等物体都可以做为〈流动〉的主体或客体来表述；与此相反，汉语面对这些物体的流动事件都不常用动词“流”来表述，分别会用“漂”、“冲”等不同范畴的动词来表达。三：日语爱用隐喻 metaphor 和转喻 metonymy 这两种认知机制来使语言表述形式得到延伸；汉语一般只用隐喻，很少用转喻来表述此类〈流动〉事件。

研究発表

1

テーマ：接続助詞「のに」による言いさし文に関する研究—中国語の副詞“明明”文との対照を中心に—

発表者：何 潔（九州大学大学院）Mail: zjhj89@gmail.com

要旨：

日本語には、「一生懸命勉強したのに。」のように従属節のみで終結する「言いさし」文と呼ばれる言語表現が存在する（白川，2009）。一方、中国語では、接続表現が形態的に拘束されずに使われるため、これまで日本語のような従属節のみで使用される「言いさし」現象は存在しないと言われてきた。しかし、中国語の会話文を調査したところ、中国語にも日本語の言いさし表現と同様の言語現象が存在していることが明らかになった。

先行研究では、言いさし文としての「のに」文（「S1 のに。」）が、完全文としての「のに」文（「S1 のに、S2。」）の主節 S2 が省略されたものであると指摘している。これを踏まえて、「一生懸命勉強したのに。」の後件をあえて復元してみると、「合格できなかった。」という主節に還元できると考えられる。一方、「一生懸命勉強したのに。」を中国語に翻訳すると、“明明努力学了。”となる。説明の便宜上、この“明明努力学了”のような構文を“明明”文と呼ぶことにすると、日本語の言いさし「のに」文と同様に、この“明明”文の後件は“却没有及格”という主節に還元できる。そのため、中国語にも日本語のように従属節のみで用いられる言いさし表現が存在すると言える。

本発表では、言いさし文の日中対照研究の一環として、統語論的構造と語用論的機能の角度から、言いさし「のに」文と中国語の副詞“明明”文との対応性について分析することを目的とする。

2

テーマ：脳内時空間と文法—“在+場所”と“在+動詞”—

発表者：岡原嗣春（大阪産業大学非常勤講師）Mail: O T <t_okahara@hotmail.com>

要旨：

これまで“在+動詞”について多くの研究者が様々な角度から研究を行い、それぞれ成果を数多くあげて来た。本発表では「概念の写像」という角度から考察を進める。

人間は無意識のうちに「空間」と「時」の両者間に「連続と変化」という共通項を見つけている。そのため、多くの空間における表現を「時」の表現へと写像する(例:「時代をさかのぼる/くだる」)。中国語の“在+場所”(空間的表現)も、「連続/変化」が共通項となって“在+動詞”のような時間的表現(進行表現)となったと考えられる。こうした例は日本語や英語にも見られる。しかし、「概念の写像」という角度からだけでは説明が不十分に思える。よって、更に脳内時空間と“在+場所”“在+動詞”の関連にも注目する。

3

テーマ：又吉直樹著『火花』と毛丹青译《火花》—日中対照表現論・文学作品(日→中)事例研究②—

発表者：藤田 昌志(三重大学) Mail: fujita@cie.mie-u.ac.jp

要旨：

表題の『火花』(日)→《火花》(中)について、事例研究を行った。筆者にとっては拙著(2017)第5章 村上春樹『ノルウェイの森』と林少华译《挪威的森林》に続く、二つ目の日本文学作品中国語訳の事例研究である。

4 各論では 4.1 転換(日→中)についてで 4.1.1 受身表現についてと 4.1.2 使役表現についてとして、受身表現と使役表現の事例研究の結果、考察を述べた。4.1.1 受身表現については 4.1.1.1 受身(日)→非受身(中)(84 例。以下、同様に数字は例数を表す。)と 4.1.1.2 非受身(日)→受身(中)(15)に分かれ、4.1.1.1 受身(日)→非受身(中)(84)については第1位の「主客転換(日→中)」(38)を表現の類型の面からも考察し、①受身(中)②非受身(中)（「主客転換」など）③“被”字句に使用されることもあれば、「主客転換(日→中)」に使用されることもある部類の動詞“说”“问”—に言及した。この③や(日本語・中国語の)「名詞のトコロ性」(名詞に方位詞をつけなければならない、つけてはいけない、どちらでもよい)の場合や“让”“令”“使”“叫”などの使役表現(中)について①原因事物を主語とする実質的意味を持つもの(“让”)②形式的記号化(“令”が多い)③①②の間のも—の3種があることは対照の類型化を考える際、重要である。4.1.2 使役表現の 4.1.2.2 使役(日)→非使役(中)(18)では非使役(中)のうちの6例が使役表現(日)=動作主中心表現(日)→事物中心表現(中)=非使役表現(中)であること、その他の12例は意識(日→中)であることを述べるが、4.1.5 動作主中心表現と事物中心表現(14)では、動作主中心表現(日)→事物中心表現(中)が13例、事物中心表現(日)→動作主中心表現(中)が1例という結果で、前者の13例のうち6例が使役表現(日)=動作主中心表現(日)→事物中心表現(中)=非使役表現(中)であること(4.1.2.2の6例と重なる。表現の連続性、関連性。)、13例はいずれも身体部分(ex.「眼」「腰」「肩」「手」etc.)を主語や目的語にするものであった。(加訳(日→中)、減訳(日→中)については省略。発表レジュメ参照のこと。)

今後も日本文学とその中国語訳、日本語で書かれた論説文・評論文・エッセーとその中国語訳などを資料、題材として日中対照表現論(日→中)の事例研究の深化、伸展を期したい。

4

テーマ：论形容词的几种特性

発表者：时卫国（山东大学）Mail: shicheng@uecc.aichi-edu.ac.jp

要旨：

现代汉语形容词有几种特性，如可控性、描写性、色彩性、主观性、修饰性和被修饰性等。可控性是说话人对听话人发出指令、劝说、要求或提醒等信息时所呈现出来的语法特性，也用来表示说话人自己的意志、愿望或主张等。形容词可以分为两大类：具有可控性的形容词和没有可控性的形容词。描写性是形容词本身具有的特性之一，具有很多特点，也有某些限制。色彩性则是汉语形容词的显著特性，这种特性影响到某些形容词的语法功能，语义限制影响功能发挥，也是汉语的一种特色，在以往的研究中有所涉猎，但未得到深究。主观性研究也是当今语法学界关注的焦点之一，主观性与可控性、色彩性有密切关系，彼此具有关联性。对形容词主观性的考察，有利于对形容词整体特点的把握，也有利于对汉语的认识和理解。本研究将围绕上述课题展开，考察形容词的语法特点。

5

テーマ：「慰め」行動における日中比較研究

発表者：高琳（神戸大学大学院）Mail: gaolin1452122626@yahoo.co.jp

要旨：

慰め行動はどの国の言語にも存在し、日本語や中国語も例外ではない。どの文化圏でも、慰めという行為を行うことで、よりよい人間関係を保つことができる。外国人日本語学習者は日本人を慰める際に、日本人と異なる慰め方を行っても、失礼だとは思われないこともある。本研究では、単に言語間の個別的な異同について論じるのではなく、言語のもつ普遍的性格や多様性を考えていきたい。日中両言語における慰め行動のストラテジーとその特徴について対照研究を行うことで、互いの言語学習者に日中両言語の共通点と相違点をより明確に理解させ、異文化間コミュニケーションにおける誤解を防ぐ一助になればと考えている。今回は日本のテレビドラマ5本と中国のテレビドラマ2本を扱う。「家族の間」と「親友の間」で慰める側と慰められる側の対人関係にしばって分析した。日中の「慰め」行動を「家族」と「親友」に分けて論じる理由は以下となる。「慰め」における対人関係という要素を考える際に、日常生活の実情を考慮に入れると、一般に慰める行動は難しいと言わざるをえない。そして、意図をもって、目上の人や初対面の人を慰めることは実際には容易ではない。また、親しい間柄でなければ、落ち込んでいる原因について知ることや、相手の負の感情を意識することはそれほど多くない。日本語と中国語において、家族と親友に対する「慰め」行動における慰める側と慰められる側の特徴を明らかにする。

6

テーマ：中国語における「一」を伴う数量表現の用い方の特徴について

—日本語との対照の視点から—

発表者：吉野孝介（京都外国語大学大学院）Mail: zhichangyu@icloud.com

要旨：

中国語の「数量表現」、特に「一」を伴う数量表現が日本語より多く用いられることは中国語の一大特徴とも言える。これは日本人の中国語学習者が間違いがちな部分でもあるので、本発表は「特定化機能」、「焦点化機能」の視点から、日本語との対照も兼ねて、なぜ中国語では「一」を伴う数量表現を使わないと、文として成り立たないのか、その原因を分析し、中国語の「一」を伴う数量表現の使われや

すい場面を記述し、その用い方の特徴について考察する。

“买了（一）件衣服”、“他是一个好人”のような【VP+“一”を伴う数量表現+NP】【NP1+是+“一”を伴う数量表現+ADJ+NP2】を、「“一”を伴う数量表現」が用いられない【VP+NP】（“买了衣服”）、【NP1+是+ADJ+NP2】（“他是好人”）と比較し、中国語母語話者を対象にいかなる文脈に使うかを調査し、それぞれのパターンの使用実態について仮説を打ち出す。それぞれの仮説を裏付ける資料として、コーパスから考察対象となる訳文を抽出し、日本語から中国語に翻訳した際付け加えた「“一”を伴う数量表現」の特徴を明らかにする。

7

テーマ：「恵まれる」構文の特異性について

発表者：馮一峰（京都外国語大学大学院）Mail: 18mb0213@kufs.ac.jp

要旨：

日本語の動詞「恵む」はよく「いい天气に恵まれた」、「経済的に恵まれていない」というように受動形の「恵まれる」という形式で用いられる。しかし、このような表現は、中国人日本語学習者にとっては案外難しい。そこで、中国人日本語学習者が「恵まれる」構文を使いこなせない原因を探り、「恵まれる」構文の特異性を明らかにする。

まず、「恵む」構文の構造及び動詞「恵む」とほかの三項動詞との違いを考察する。そして、コーパスを利用し、抽出された例に基づいて、「恵む」構文の主語、間接目的語と直接目的語として用いられる語彙の特徴及び相互意味関係について考察する。

それから、日本語の直接受動文の統語構造を明確に記述し、直接受動文の統語構造と対照しながら、「恵まれる」構文の統語構造及び「恵まれる」構文の統語構造の特異性を明らかにする。さらに、「恵まれる」の統語構造が成立する原因について考察し、日本語の受動態には「述語動詞を自動詞化する」機能があることを明らかにする。最後に、「恵まれる」構文の中国語訳と「恵まれる」構文で翻訳する中国語を両方考察し、「恵まれる」構文を通して、日本語と中国語の受動態の違いを明らかにする。

8

テーマ：中国語の“被”構文と日本語の受身文の重なりと相異—述語動詞の範囲を中心に—

発表者：劉嘉勇（名古屋大学大学院）Mail: ryukayu1995@yahoo.co.jp

要旨：

本研究は中国語の“被”構文と日本語の受身文の述語動詞の範囲を考察しようとするものである。日本語では「会議が行われた」のような受身文が普通に使われているのに対し、中国語では「*会议被举行了」のような文は言えない。また、中国語では「被石头砸了」のような“被”構文は自然に言えるが、日本語では「*石に当てられた」は言えない。このように、両言語の受身文の述語動詞の範囲は非対称的である。これまで、多くの先行研究では生産動詞などが中国語の“被”構文に使いにくいと指摘されている（楊彩虹 2009、王亜新 2016、etc）が、コーパスで検索した結果を見ると生産動詞の“被”構文の用例数が意外に多い。ただし、中国語の生産動詞の“被”構文は成立するため、結果補語が後続しなければならない。そして、“被”構文と日本語の受身文の述語動詞の範囲における異なる部分があれば、重なる部分もある。両言語の受身文における述語動詞が重なっているとしても構造上にも共通点と相違点がある。本研究は先行研究の成果を踏まえ、両言語の受身文の述語動詞の範囲に重心を置き、網羅的に日中両言語の受身文の異同を記述していく。